

# 人とつむぎ、 織りなす日々のなかで 高齢期の発達

## 第7回 トシエさんの「絵日記」 伝えたい思い

先月号では、もみじ・あざみのみなさんが友だちとともに学習会や追悼会などとおして、暮らしのなかで死にかかわる学びと気づきを重ねていると紹介しました。また、言葉や手紙で自分の想いを表現するナツコさん、ユミコさんが、想いを言葉で表現できない友だちに対して、共感する言葉をかけていることにふれました。その友だちが大切な人の死に對してみせる姿にかかわらず、共感の言葉を伝え続けています。それは、ともに学び生き、他者と支え合って生きることの意味と、その大切さをナツコさんとユミコさんが感じているからなのでしょう。

今回は、2年前に大好きなお父さんが亡くなられ、ナツコさんとユミコさんをはじめ、たくさんの方の友だちから折にふれ共感の言葉をかけられてきたトシエさんの変化について考えます。

はじめのころは、職員が供える花を買いにいこうと、トシエさんを誘っていたようですが、最近では職員が別の話題で「花」という言葉を口にすると、「はな かう!」「はな かう!」と自分から職員に迫って要求するようになったといえます。きっかけとなる言葉は必要ですが、20年近く、トシエさんとかかわってきた職員も驚く姿であったようです。

お父さんが亡くなったことについて、トシエさんがどのように感じているか、受け止めているかはわかりませんが、会えない大好きなお父さんに花を供えたい思いがしっかりとした要求につながっています。毎年の追悼会や友だちが花を供える姿、言葉がトシエさんのなかで、意味をもち始めていると考えられます。

トシエさんの「はな かう!」にみる要求の表出には、お父さんが亡くなった時期の少し前からはじめられた実践の積み重ねがかかわっていますが、高齢になるまでのトシエさんについて少し振り返った後、その実践を紹介します。

### 「岩」のモチーフになるトシエさん

トシエさんは、幼いころに当時のあざみ寮に入寮し、すてきなむすび織の作品を作り続けています。30歳頃のトシエさんについて、むすび織を指導してきた石原繁野さんは、次のように書いています。

「無口でいつもニコニコのトシエちゃんは、絵を描くことが大好きです。描きながら、いっぱいお話が生まれます。彼女の描く力強い鬼の絵をむすび織にしてみました。赤、青、



▲芝生が見える研究室から

## 張 貞京

ちゃん ちよんきよん/京都文教短期大学准教授。共著に『保育者のためのコミュニケーション・ワークブック』（ナカニシヤ出版）。

### 「はな かう!」

現在60歳代後半となったトシエさんは、自ら言葉を発して要求を出すことがほとんどありませんでした。職員や友だちが話しかけた言葉をそのまま繰り返すこともありましたが、嫌なことには「うふふ」と笑いながら答えません。好きなことについて尋ねられれば、ニコニコしながら尋ねられた単語で答えることが多いです。好きなことは、家族や友だち、むすび織、絵を描くことですが、なかでも大好きなお父さんについて尋ねられると、「おとうさん くる!」と二語文で話し、答えを確かめながら期待する姿がありました。

その大好きなお父さんが亡くなられ、葬儀にもきちんと出席し、もみじ・あざみに戻ってからは、自分の部屋にお父さんの写真を飾っています。職員や友だちがいっしょに花を供え、手を合わせてきたそうです。

黄色、ピンクにむらさきと、色とりどりの鬼が生まれます。本当の鬼は恐ろしく、節分の夜は苦手です\*  
鬼をモチーフにしたトシエさんのむすび織の作品



▲今年のむすび織作品。力強い黒鬼

は、模様の確認と色の切りかえをする際、職員の確認が必要ではありますが、なにを織っているか尋ねられるとニコニコの笑顔になって「おに!」と教えてくれます。絵のなかやむすび織の鬼は楽しく好きですが、目の前に現れた節分の鬼には、どう対応すればよいかわからなくなるようです。

もみじ・あざみに通い始めた私は、職員から当時30歳代であったトシエさんが時々「岩」になると教えられました。節分の鬼に遭遇したときのように、トシエさん自身がどうすればよいかわからず困ったとき、「岩」のように動きが固まるという意味です。この状態になれば、どのような説明でも次に進むことができず、好きな話題で安心させ、その場を離れるしかなかったそうです。あるときは職員数人でトシエさんを運び出さなければならぬこともあったようですが、わからないことに不安を強く感じていたためだと考えられます。

そんなトシエさんが歯科治療をうけなければならなくなつたときです。激しく抵抗することはありませんが、診察台に座れても、まったく口を開けなかったそうです。どんな説明